

# 紛争からの復興都市

井澤 知旦



ドゥブロヴニクの旧市街地(オールドタウン)

六つの社会主義国が統合されてきたユーゴスラビア。戦後、国家再編がなされ、再び六つの国に分離した。政治経済に翻弄されながらもパワフルに生き抜くクロアチアとスロヴェニア等を紹介する。

## クロアチアの首都ザグレブ

クロアチアの人口は四百二十万人、首都のザグレブは八十万弱である。イタリアとアドリア海を挟んだ対岸にある。一九九一年に旧ユーゴスラビアから独立した後も、一九九五年まで紛争が続いた。社会主義時代の負の遺産(生産性の低い国営企業の存続や汚職、財政赤字、低成長、雇用の停滞)が残り、国民貯蓄の九割はユーロ建てで自国通貨が信用されていない。

ザグレブの中心市街地には中世からの落ち着きのあるまち並みが残り、緩やかにカーブしながら変化する景観は絶品である。またそこには広場やモール(歩行者専用道)、緑地帯が大きな面積を占め、それぞれ屋台マルシェ、カフェテラス、休息の芝生広場として活用され、多くの住民や観光客を



ザグレブの中心市街地

惹きつけるインフラとなっている。さらに道路車線を減らして、車道にカフェテラスを設置している。

## 世界遺産ドゥブロヴニクの旧市街地

ドゥブロヴニクは、アドリア海の港湾商業都市として栄えた。旧市街地(オールドタウン)は城壁に囲まれた街で、一九七九年に世界遺産に登録された。一時期はユーゴスラビア紛争によって破壊されたが、今日では美しい旧市街地として復元されている。

城壁はほぼ円形で約2kmの円周なので、およそ30haの規模。そこに二千人が居住している。メインストリートは一〇m±〇・五mで、最小幅員の路地の場合は一・八mといったように様々な幅員を持ち、どんなに狭くてもカフェテラスが置かれている。城



ドゥブロヴニクの夜の旧市街



ドゥブロヴニクの旧市街の居住地区と切取風景

壁内はすり鉢状で、メインストリートが底にあるため、城壁に近づくほど上り階段の坂道になる。メインストリート界隈は飲食店や土産店が集積し、城壁に近いエリアが居住地区になる。居住者は高齢者が多く、彼らにとつては住みづらい場所なのだろうが、これが当たり前の生活ならさほど苦にはしていないのかもしれない。

### スロヴェニアの首都リュブリアーナ

スロヴェニアの人口は二百六万人、首都リュブリアーナは三十万人弱である。国全体の人口は名古屋市の二百三十万人よりも少なく、面積ではほぼ

四国の大きさの国である。スロヴェニアは旧ユーゴスラビアの北端にあり、オーストリア、イタリア、ハンガリーに接する。独立にあたってはわずか十日間で戦争が終わったため、インフラが戦火に遭わず、経済は比較的順調に伸びてきた。所得水準は東欧の中で最良で、ドイツの半分程度である。二〇〇四年にEU加盟、二〇〇七年にユーロ圏に加わる。しかし、港湾や鉄道貨物のインフラが公営企業であるため、インフラが不十分のままで、成長余地があるにもかかわらず（後背地にオーストリア・ハンガリー・ポーランドの工業地がある）、成長を妨げていることが課題となっている。

首都リュブリアーナは世界遺産の都市ではない。一八九五年にはマグニチュード六・一の震災に見舞われ、当時の一〇%にあたる千四百の建物が破壊された。市のシンボルであるリュブリアーナ城も被害を受け、復元しようとしたが、あまりにも住宅不足であったため、避難所に改造されて五百人がこの城で暮らした。それは一九六四年まで続いた。震災後はウィーン分離派（代表的建築家ヨジエ・プレチュニク等）様式により再建が行われたためどこでもその様式を目にすることができる。古いまち並み、緩やかにカーブするモール、そこに置かれたカフェテラス、人の行き来を容易にし、時に驚きを提供するパサージュ、そして常

に流れる川、シンボルとして目立つ城や大聖堂、ところどころに人々が集える大規模公園、物価も安く（感覚的に日本の二分の一か）居住地としても観光地としても落ち着いた都市である。二度と来ないかなと思いつつ、二万歩を歩き続けたリュブリアーナであった。

### モスタルとスタリ・モスト橋

ボスニア・ヘルツェゴビナの都市の一つでネレトヴァ川に架かる橋スタリ・モストがここでのシンボルである。橋を隔てて西にクロアチア系、東にイスラム系が共存していたが、ユーゴスラビア紛争でセルビア系も加わり、一九九三年に完全に橋が破壊された。二



リュブリアーナのモールとオープンカフェ

〇〇四年にユネスコの協力を得て復元され、翌年には世界遺産に登録された。現在は観光地として栄えているが、一歩裏に回れば、紛争の傷跡が修復されないまま残されている。



紛争の傷は癒えたのか？モスタルのスタリ・モスト橋とボスニア・ヘルツェゴビナ戦士の墓